



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

本  
編

卷之三

中興行草書

昭和二十一年正月九日



門號卷 13  
3245  
1

此書竊ふ細々要記。櫻雲記。吉野拾遺南朝記。圓太  
齋。鎌倉大草紙。足利治乱記等の諸説を据えり。もとより  
捕氏の事蹟を述るどり。亦彼三捕實錄。捕戰功實錄  
捕家全書。捕軍物記。捕物語。木の説と固くべ。この事要く  
ハ寓言す。只阿染久松が寄縄をいもんとく。姑く捕氏の  
名を借るのを。夫艶曲演戯の誘淫猥褻の花  
更ふ松塗の節操欠縁。七草と命の花。華説の花  
のよし。事實の実うすとがく。こか一首を證うて一部の要を  
語りのよし。乞ふ松の操ゆ萬かつてあらば。深むよし。

序

醫隱堂

積兩冊銷新月既軒。忽見ある至秉燭  
出廷。卽書肆文刻堂主人也。自陳景  
肴浪華。寫林森本生。肴竊請于先生。  
使僕致素鳥。余後二更寒葛。考索告  
成。敢靖余曰。曩者森卒氏。請蓋社編  
輯院本所記。阿染久松博充之事也。

余熟思之。夫久松以一一暨兒奸于王家。女妨其婚期。遂至情急。勢迫相惧。枉死子庫中。則是不義不孝之大者。宜以爲戒。或豈可更筆之冊子。以宣淫風哉。此余之所以振筆。躅蹻未應其請也。文刺堂笑曰。先生之言固是矣。但書賣相謀。不在義而在利。森本生以此事煩先生。亦是超時而已。加之千里之請。不可峻拒。冀再思之。於是余乃感其言。有理。翻案數日。主其事而。不拘其迹。換骨奪胎。別自編修。一稿。少說以塞其多。其間勸善戒惡。叙又情託風教。比毫微意所存實作。者一片。老婆心也。嗚矣。余雖以著作。

自號上比年撰述幾二百部書賣清索

相踵于門不暇蓮思以故徃々不免

疎漏復多之消也况安事僅出乎數

目新案唯恐文詞鄙陋其不足以從

動<sup>スルニ</sup>従善之良心矣閱者幸恕之可也

文化戊辰年孟秋中澆著作堂主人

高子江戸飯台隱居



吾屋戸乃一村  
茅子乎念兒  
余不令見殆

秋七種  
第一芳薺

河内郎正元

山家税年

秋野之草花  
我未辛押靡而  
來之久毛知久  
相流居可聞

秋七種 第二  
芒花



丹五兵衛妻

阿也女

我屋戸乃葛  
葉日殊色付  
奴不座君者  
何情曾毛

葛第三  
葛花

秋七種

葛花



賣油郎  
丹立兵衛

此里者繼而霜哉  
置夏野余吾見之  
草者毛義和多里

家利

秋七種

藤稗

第四

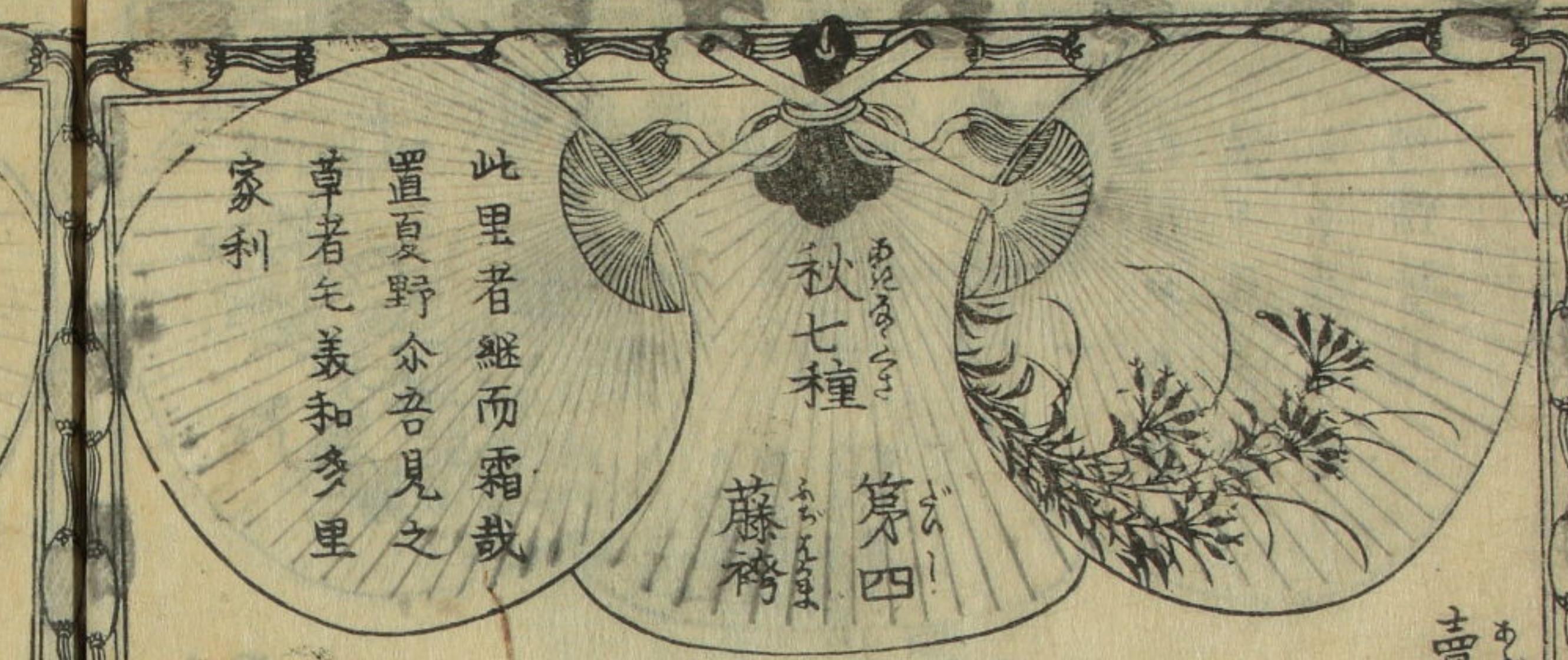
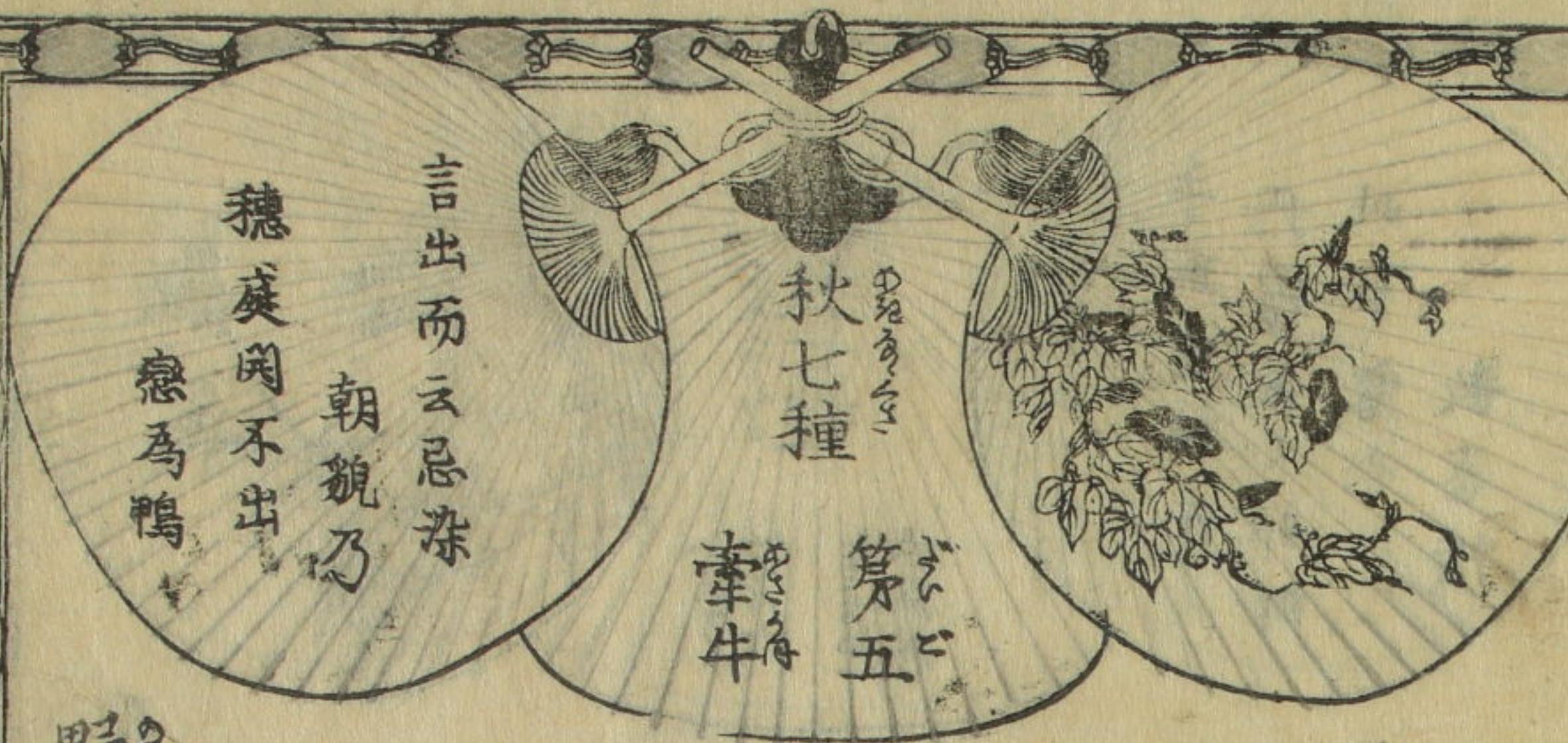
秋七種

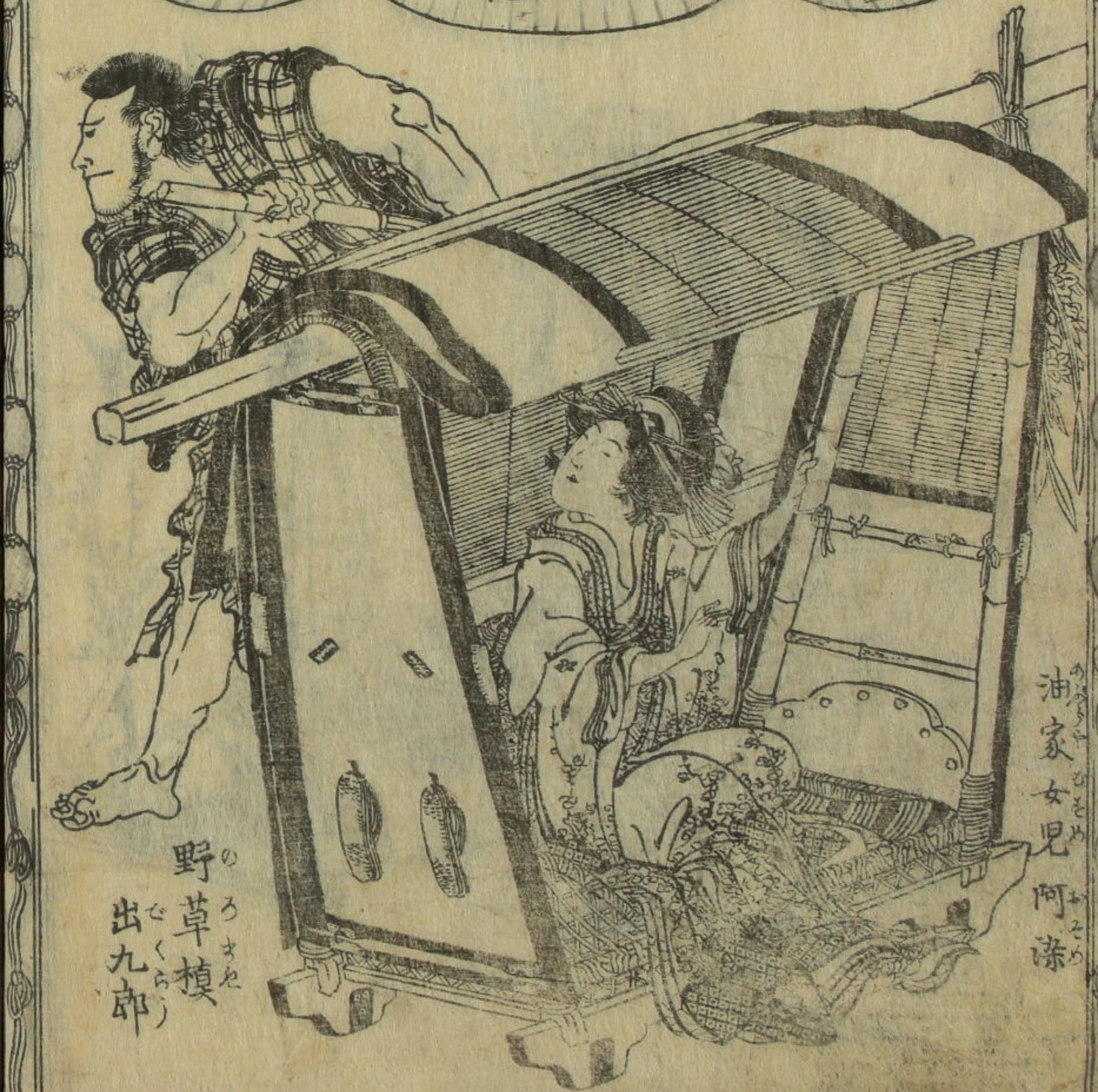
第五

牽牛

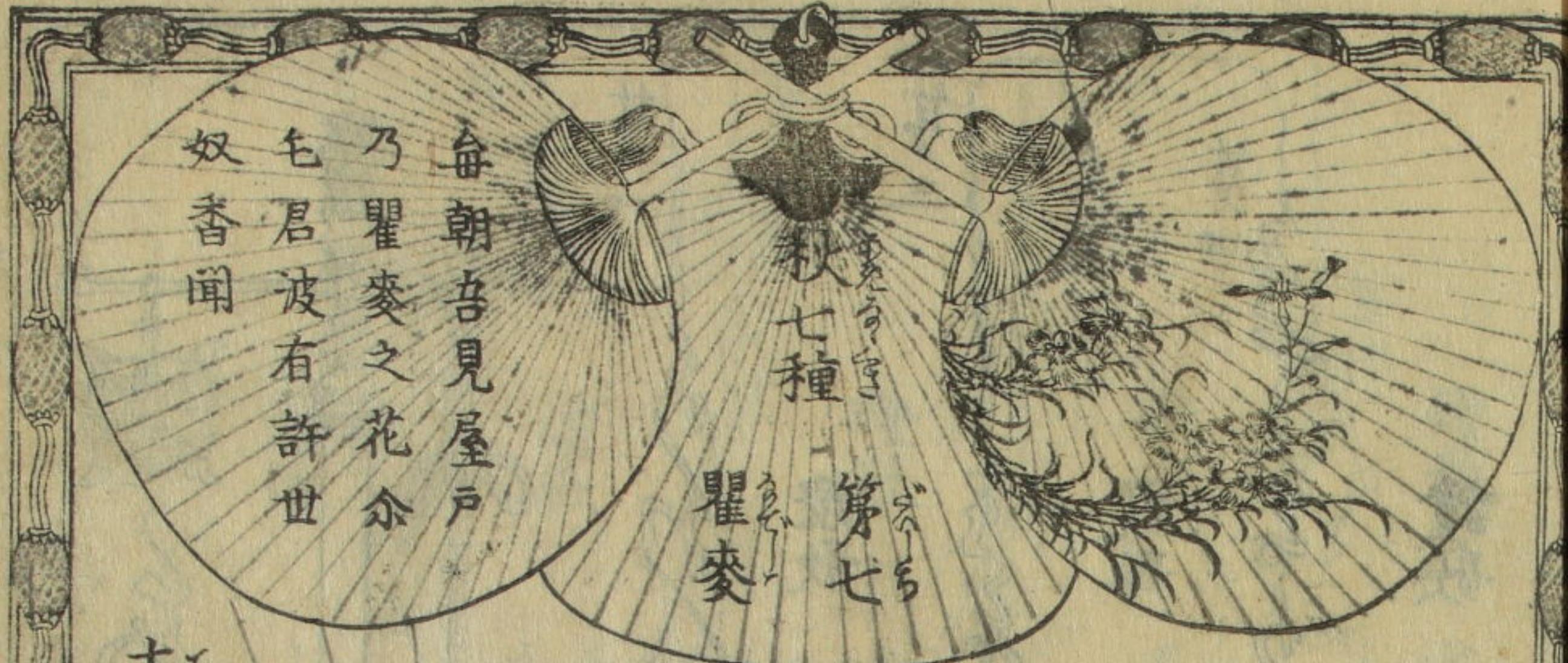
言出而云忌殊  
朝覲乃  
穗庭罔不出

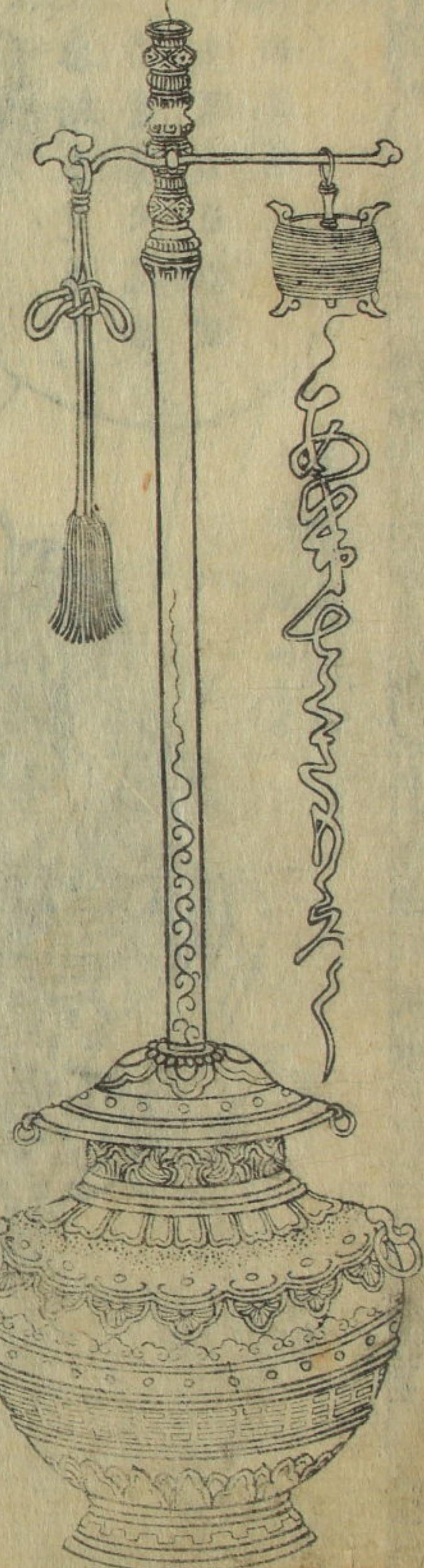
野崎久作





小厨久松





第一  
第ニ

證歌 郡守の山を向くとも康のよく冬よも竹も梅の山をと  
不思議のまほほまほめぞ草木あらわすやうは。

第三

證歌 中三日風とふたく波とくは浪川よりそく風か

第四

證歌 物よりよき野の原吹けゆけは神づけよとゆき

第五

證歌 秋ればゑむきよの松すみかまくと玉とくそら種

第六

證歌 又たうひせふかみのきよ香る桂すみよ風かよ

第七

證歌 山手の志のあこぐれの志のあよめすみうれ紹興の花

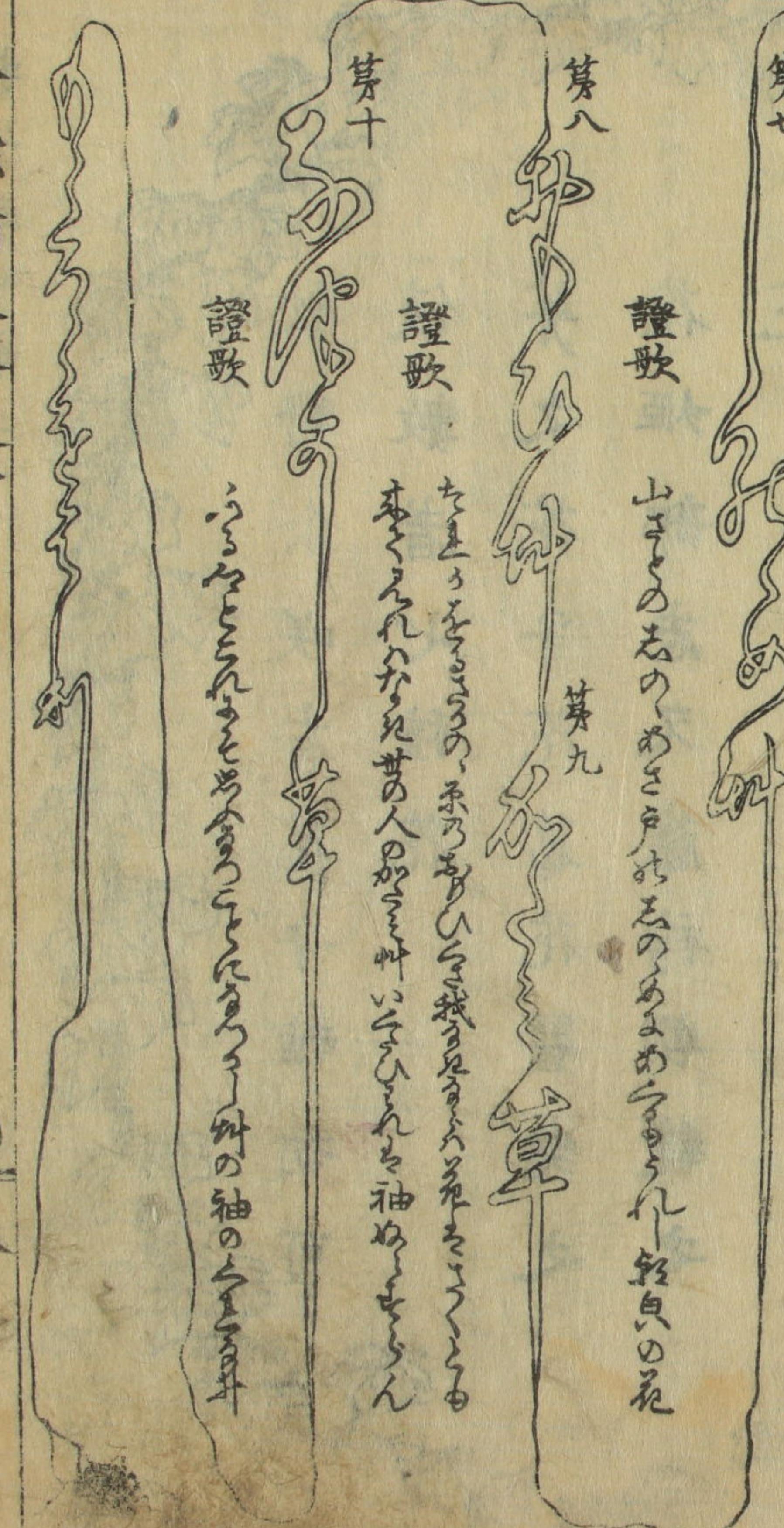
第八

證歌 さよをむくの、おろあがひに我すみくねそよぐとくの  
あくえのかな世人の加くせんいざひれも袖ぬくさん

第九

證歌 さよをむくのとくくまうとくくまう一叶の袖のくまく

第十



秋野余咲有花守指折可  
伎數者七種花  
花姫部志又藤袴朝覲之

右二首山上憶良諒秋七種詩

松濤情史秋七草卷之一

東都曲亭馬琴編次

第一芳宜ふ名教

鹿鳴草

都すゆ咲匂へよ鹿の鳴く。名はあひ草へ秋の山里と疏ト久。浮世の秋  
の憂ふうれそ。いともがうを十善の君づ。吉野の山居しむる頃。南朝  
股肱の武臣なうり。楠左馬頭正儀も。正行かかふく。正成か二郎  
も。抑河内判官矯正成ハ。補正澄か嫡男か。その先  
生。誠忠武畧。古今ニ抜萃し。世ニ許されよ。良將アリヒト。今運後小  
時を泥ど。やく未の年。もくと延元の年。立月を名ス。ハ  
日才正季等と。小寇を防ぎ戦ひ。檢判。漢河の上。或も。川  
うめ。あらん同胞ぬを。腰うた切く死よ。ゲミバ。後醍醐の帝。り

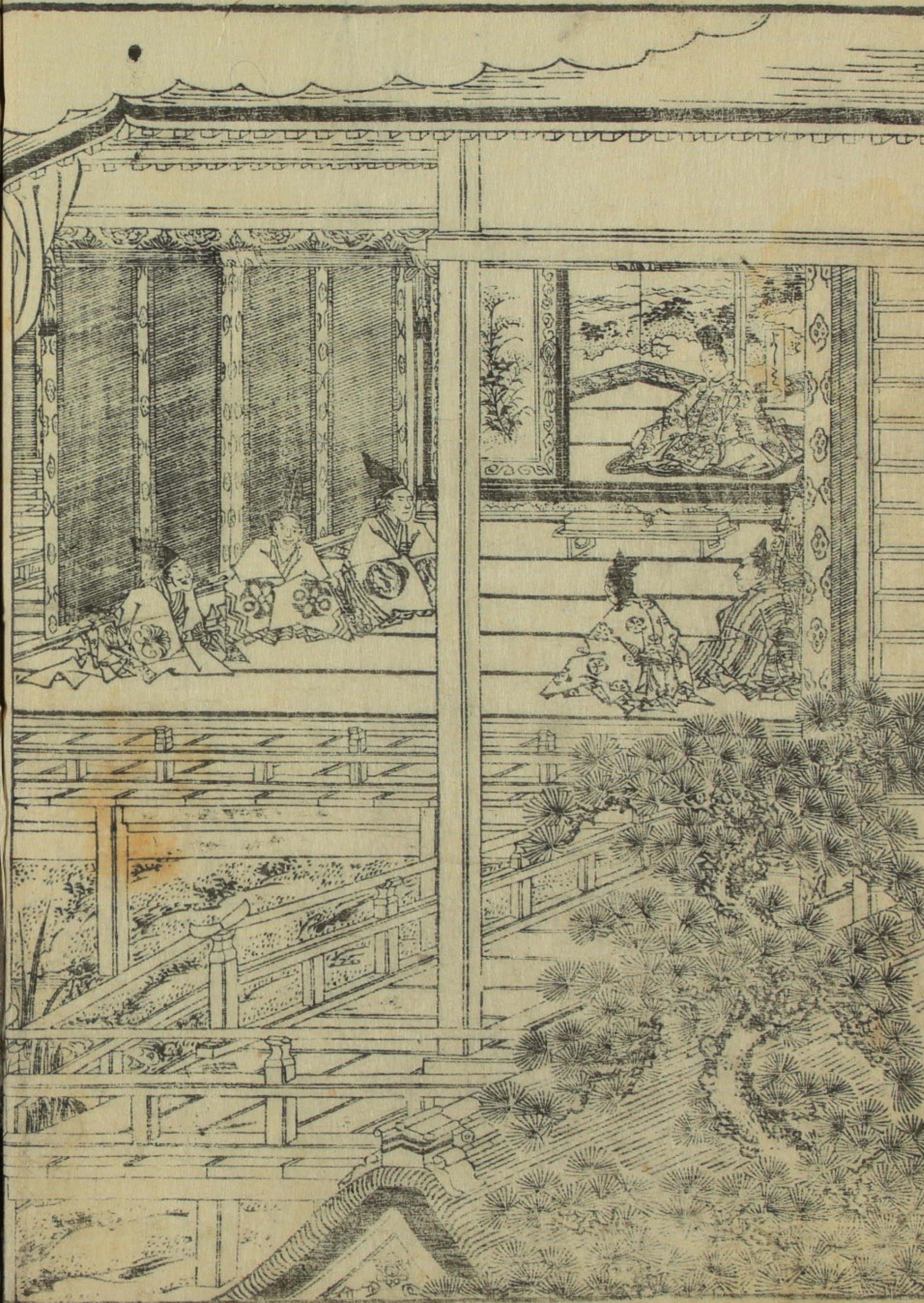
松浦憲史卷之一

九

惜ませゆひく。正三位。近衛の中將を贈り。根河泉三州の大守。  
す。仰下されり。生残する親族が面目に立たず。敵も自方も。嘆賞せま  
へる。しとぞ。正成が嫡子正行。その志。親よりうど。とゆゆる一  
子。氏兄弟を討滅し。居父の仇を報ん。と董らす。ひともう。忠孝  
空く。憂苦の中。朱長。あぐく。足利の大軍と挑戦し。勝。やまく。  
といふとほ。あれども。長河船横りて。謀畧用ひとぞ。世を取る。やせん。  
南帝。後村上院の正平四年と號す。正月立日。左衛門尉兼河内守。橋正時。  
時。その方右衛門尉。橋正時。木村内園河内郡。四條繩半。駄向。京  
ヶ。まこと。名前。家の大敵。血戦。敵。駄擊。自方も。残り寡く。駄見。よみれど。隠脱  
うが。晚るべし。かく。と。薰く。や。バ。掉弓。また。斂。より。名。を。ぞ。ご。じる。と  
詔。と。言。の。紫。を。い。づ。か。せ。と。や。同胞。絶。と。対死。と。実。よ。北朝の。貞。和立  
年。う。か。一。後。も。二郎。左衛門。正儀。の。正成。が。彼。う。れ。ば。居。ゆ。い。と。惜。の  
り。ふ。思。食。く。四位の。左馬頭。よ。う。れ。く。と。正儀。は。その。志。又。ゆ。む。兄弟  
を。う。ね。ど。ま。が。正成。が。子。正行。が。方。見。が。武。畧。も。凡。常。か。あ。く。と。日本  
を。う。れ。と。畿。内。の。強。敵。ゆ。す。を。根。河。城。を。落。す。と。河。内。え。く。身。さ。る。の  
過。半。を。敵。ふ。う。け。と。千。劍。破。赤坂。の。城。を。落。す。と。河。内。え。く。身。さ。る。の  
の。う。な。と。畿。内。の。強。敵。ゆ。す。を。根。河。城。を。落。す。と。河。内。え。く。身。さ。る。の  
を。佐。そ。足。利。の。大。軍。を。攻。靡。一。文。和。の。う。れ。ハ。新。将。軍。義。経。京。都。を。没。落  
く。近。江。路。よ。逃。走。北。朝。の。帝。崇。光。院。光。嚴。光明。の。兩。上。皇。と。南。軍。よ  
捕。ひ。見。く。吉。野。へ。逃。り。人。と。こ。と。併。捕。正。儀。と。和。田。正。武。が。勲。功。く  
ふ。駿。の。年。を。經。く。南。朝。の。正。平。廿。四年。北。朝。應。安。二。年。三。月。の。う。れ。後。村。上。院。崩  
す。す。く。聖。等。四。十三。に。死。え。と。懇。成。皇。子。吉。野。の。宮。よ。受。禪。ゆ

松濤情史卷之一

て。且を後龜山院とぞすまし。さくとく捕正儀。ハ。の年。本種。この隣畠  
を。やし。珍んと。も。ふ。勤も。され。が殿上人生。上達部の長。僕残。よ。阻入  
ら。且。遺恨。す。く。と。今。茲主。上。み。う。せの花の梢の雲。か。  
く。忽地崩。ひ。く。せ。も。も。や。く。と。浅。す。く。南方衛護の志。を。變。  
老黨の。速。も。聽。ど。子。ぐ。も。ら。ふ。も。あ。と。せ。ぐ。く。ふ。の。び。く。よ。管領。賴。之。又。消  
息。く。足利家へ。降。系。と。べ。き。よ。誓書。を。り。く。ま。け。し。入。ま。う。ば。時の將  
軍。足利。爰。滿。速。よ。許容。あ。く。右馬頭。賴。之。赤松判官。ホ。と。捕。が  
赤坂の城へ。遣。る。か。そ。同年。四月。下旬。よ。正儀。入。治。し。あ。賴。之。が。宿所  
ふ。到。く。故。を。速。勅。盃。了。く。彼。人。よ。誇。り。生。爰。滿。將軍。よ。見。集。く。  
龍尾。と。り。太刀。を。進。う。や。く。爰。滿。も。殊。よ。賴。く。睡。く。笑。え。く。件。の  
太刀。を。極。珍。せ。ど。る。そ。そ。の。條。と。物。縁。の。覆。端。ふ。く。例。の。寓。言。の。く。  
あ。く。ね。ど。正儀の。工。虚。實。を。觸。つ。る。あ。く。と。ど。細。く。要。記。移。雲。祀。足  
利。治。亂。記。ホ。正儀。か。足利家へ。降。系。の。よ。と。裁。う。鳴。呼。い。う。豆。バ。  
あ。へ。南朝。棟梁の。武臣。ト。く。又。と。兄。との。遺訓。を。忘。し。廿。年。本。の。忠  
義。を。化。う。く。仇。人。の。前。よ。腰。を。折。め。親。族。こ。と。が。為。く。歯。を。切。る。と。も  
影。護。と。せ。ど。世。の。人。と。の。友。ふ。あ。ざ。と。笑。ふ。と。す。耻。辱。と。せ。ど。應。く。赤坂の  
城。ふ。立。帰。り。絶。く。南朝の。勅。命。よ。應。せ。が。く。と。そ。浅。猿。空。み。の。と。を  
守。正。元。と。り。う。との。同。胞。又。が。足。利。家。へ。降。系。く。る。よ。と。笑。て。い。く  
恨。と。憤。で。兄。オ。リ。う。と。よ。又。よ。う。と。千。劍。破。の。城。と。指。龍。り。  
い。す。南。朝。へ。忠。を。竭。と。程。よ。足。子。忽。地。よ。不。和。と。あ。う。ぬ。亦。捕。か。一  
族。よ。和。田。和。泉。从。正。武。も。い。ぬ。正。平。四。年。の。春。正。教。と。う。小。四。



家訓  
正儀  
傳  
降

条繩手さじと射死さしよ。右衆まこと尉高家の才わざ。和田和泉守遠とおるが二男ふたこ。件の正武まさぶハ武畧ぶりやくの達者たつしや。双子ふたご忠臣ちゅうしん。

正儀まさぎが舉動あひだいと朽くそと怒のり罵のの。正勝まさかつ正元まさもと父ちちとヲを。志しと義ぎもと。足利家あしかへ復か。忠節ちゆうせきふとそ。さとぶらは正成まさなりの孫まご。

名なと稱めい。貢さしだす。緒はじの姫ひめを吉野殿よしのどの。南帝なんていの勅命てきめいを稟うながす。正勝まさかつ木きと。駿すんの軍ぐん兵へいを以もつて赤坂あかさかの城じゆうへ推寄すいよ。息いのきを呴くせ。政せい経せいき。正儀まさぎ堪か難むづか。京都きょうとへ援えん兵へいを乞こ。山魚さんぎょ。榮竹えいじく。山木さんぼ。數千すうせんの兵へいを以もつて赤坂あかさかの城じゆうへ復か。合戰あつてん。正武まさぶ。正勝まさかつ。鋒とがを以もつて正儀まさぎを牛うし。和田わだ。龍泉りゆせんの城じゆう。正勝まさかつ。正元まさもとハ千戦せんせん破は。正儀まさぎの城じゆう。正儀まさぎとその間ま。赤坂あかさかの城じゆう。常つね。左右うしゆの敵てきを受うけ。ひびひび。ともろく。只ただの戦たたか。光陰こういんを過くわ。十三年じゅうさんねんを終おわ。

十六年じゅうろくねん。時とき北朝ほくしやうの永德えいとく元年げん夏なつ。首くび。正儀まさぎ長ながを病びやく。是これ秋あき。延のぶてもかくかく。病びやくの床ゆ。本ほんとく。未みのことを思おもひおも。親おやぢ同胞お同胞。南朝なんしやうの忠臣ちゅうしん。邦家ほうかの爲ため。命めいを隕おち。名なの爲ため朽く。ぬ捕つか。

の家いえを続つづ。家いえを續つづ。不肖ふしやく。緒はじの姫ひめを以もつて。洋ひろ。洋ひろを植う。耕う。士しそを糧くら。兵へいを煉れん。足利あしかの大敵だいかと戰たたか。每まい。絕ぜつ。一いつ。不覺ふくわの敗ひを取と。百ひゃく。百ひゃく勝かつの計略けいりやくを獻さ。用もちひ。計略けいりやく。聖運せいうんの頃ご。不覺ふくわ。及および。臣しもべ。道みちへ竭つく。今いまハこれをぞ。ひや。足利將軍あしかじょうぐんへ伏ふ。後あと。子孫しもべ。富貴ふきを傳つ。と。君きみ。三世さんせい。二代にだい共とも。天てんを戴たぶ。讐しのぶ。款こゝふ。媿くわい。阿容おうよう。足利家あしかへ降お。集まつ。生う涯いきの懶けら。と。不覺ふくわ。

う。予よ。ど。の。ら。新あら。新あらふ。や。ま。う。と。義ぎ。ふ。勇いさ。と。孤忠こちゆうを竭つく。と。賢けん。よ。家いえ。

門を洗へとく。判官どの正成の神灵が正勝正えが身ふそひく。ふう  
もくかくまやめんぞくん。君は叛き親は悖き。叛族ふ志よ。子ぐら  
ホヨアーハラミテ。これかう僕倖を取るとも。そのうひすある。人恨  
めふるて。これを改らる難うだ。かくあべどく今まに吉野殿へ  
まくらんち面がせり。せんての老の皴肚砍く。がくの蓋をあうとす。と君  
みも心りとまう。子どもが面をあこさんか。と頬はおひ定めて了ぶ。又正成  
う正乃へ相傳せ。軍学の秘書。櫛井の一袖。年奉受納めしてふ  
ゆ。乞を正勝正えホユ授与せまく。終ニ代人の物とすりまん。こそいふて  
子ぐもらふ。家傳の兵書を遞よびとく。とまきく。又  
ふれん。正儀が舊の家隸よ。難居兵房言直といひのあくた。往  
ふ正儀を疎う。和田正武は隨後し。年奉書泉の城。一泊。密  
くまく。視が母。豊浦の袖を引く。あみだるを。黄金めうやう  
を正もうといへ。常言ものうりのと。稚くともうるを。黄金めうやう  
へ。うちもあうるのと。しゆ。御ふ面板。物の蔭ふ躲きつ。且く  
あうて。まく。うじまふ。又がふうへ。あみだるを。いとく吹きとく。まく。あ  
う後も新ゆえせど。と日も傾く。度の樹うち。鳴く。寒蝉の声のゆえ  
と。うげする。公りそく。兵房ハ金を數果。箱へ納ん。まく。圓金二  
枚足らず。不實。と。終日。それもづく。成居。深松が外ふ。本ほ  
園宅の男女を呼び集会。むろくよこれと問う。え来るを。さうぐ  
されば。えと。おふくもふゆめと。さく。深松を疑。一見と。さうぐ  
賺せ。おふくも。既とうら掉く。おとどく。おとどく。赤裸す。おとどく。

衣もうち振ふ。襟のぎく襟の端よ。堅するありあらず。無く寝てく  
るま。失うる金より。多くとぞうふ。又も母も呆れ悲ひ。奴婢ホヘ面を  
のりて。傷痛をとひ限る。當下兵房ハノのをめり。子の民  
髪を引廻す。膝の母とうふ捺挫す。瞪とる眼中。涙を含く。高す玉声  
をうそ立。汝りかくとろ金を盜みる。明白首状せよ。そくりをさや。  
といえまきく。扇の骨も摧よ。と背三ツ四ツ打懲らし。又の怒の理されば。  
母親も禁み。奴婢ホも賭結ぬく。まよ手も握すけ。手をくす  
ぬ金を盗む。打懲さとくも。深松も二声。泣も叫びも。まこと。  
ハづをまたきふ。金慾もゆび。明白ゆずきとも。賜うとこちひ。  
うべ。足の裏。又飯糸を塗。引ちじくる金を贈著く。只二枚を盜む。  
ゆるゆく。と勧解ふ。又まことに。呆果。子を撲地と突退

。豊浦をとぞう。太もつる。息を吻き。日本。深松が言ひのひた  
と見。そえ後。ひりと多く岩ひよる。又彼が邪智の長よると。かくまぐ  
きくんとくも。うげし。召使のども。が。あり。うん程ゆいと面す。楓の毒も  
菌ふ。あり。三年茄子の花。又毒あり。世よ。あ。子をりうと。親の業  
因う。うべ。れど。惡鳥。ハ卵のうち。うよと。も。娘ベク。も。惡木。ハ嫩。な。も  
植。が。彼の年。も月。も日。も庚申。も。あ。立。五月立。日。も生。と。う。り。立  
う。立。月立。日。も生。と。子。ハ。又。母。を。食。へ。と。り。又。庚申。の。夜。も。有。子。れ  
き。例。そ。それ。み。も。う。ぐ。う。ざ。か。と。ど。が。れ。病。者。を。娘。ハ。か。く。だ  
バ。この子。盜賊。と。ある。と。り。俗。視。め。と。ど。端午。の。節。も。生。と。る。子。の。吾。人  
大。う。る。禍。を。惹。出。す。親。え。れ。や。死。す。や。す。ん。覺。知。せ。ま。と。り。ひ。り。果  
ど。因。と。抜。そ。う。揚。る。衣。の。下。ふ。母。親。も。吐。嗟。と。ひ。う。推。隔。二。の。袖

まきのひすゑ

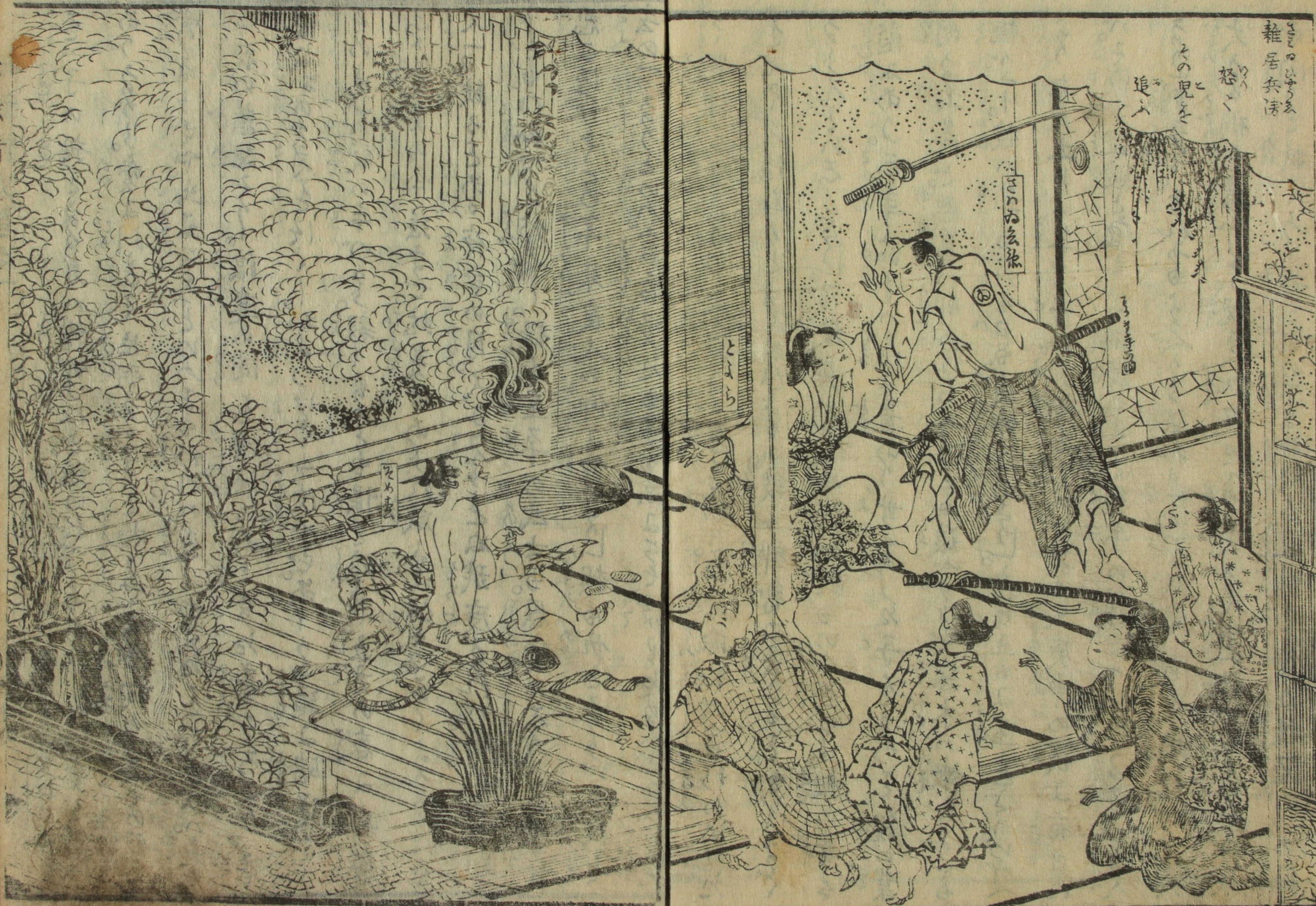
雑居兵衛

怒ぐ

その児を

追ふ

とよら



柳浪集文卷之一

そ一子の指と見る。身へ惜めねど。聴い教べく。あゝござり。養ふる理  
あり。さうぞ。愛ゆりまく。片羽うす。子を捨うみ。人世間のうべての冠り  
常ト。さうぞ。や。出外こううとりふ。正ゆければ。免へ。ざつと。一ト。よび。ひ。免  
も親の慈悲ぞ。浪速の浦を漕船の。あと。さうた。童。こうろ。よ。嗜  
慾。ふの。が。身をほくし。かうげく。改めを。あ。う。道。み。贈。送。を。  
その。う。び。の。親の。手。づ。く。殺。一。り。と。も。恨。と。仇。立。方。の。春。又。痘瘡  
き。九。方。の。今。茲。まで。眩。氣。も。あ。と。だ。風。よ。ひ。う。じ。さく。と。う。う。う。れ。を  
又。一。ヶ。缺。る。と。あ。夜。ま。の。月。人。よ。ア。キ。と。ぬ。玳。度。さ。れ。ば。助。ん。と。も。助  
ト。う。む。ひ。く。一。ヶ。よ。仇。び。一。猛。を。生。平。の。武。士。も。恩。愛。ひ。あ。う。き。め。吾  
惡。み。ほ。け。く。と。の。年。來。良。人。の。仰。よ。懃。ぞ。し。操。も。仇。と。さ。う。び。され。七  
去。の。一。ヶ。う。と。り。言。言。考。を。も。予。ゆ。名。よ。と。せ。び。り。た。き。と。う。れ。と。競  
バ。奴。婢。ホ。も。か。う。と。も。よ。と。生。く。練。う。ら。へ。た。り。ハ。兵。傍。も。泣。唱。と。  
勢。ひ。猛。い。あ。う。揚。う。る。刃。ハ。鞘。よ。る。さ。か。く。も。あ。さ。う。と。く。ね。こ。子。の。う。よ。  
豊。浦。ハ。ま。ゆ。國。府。川。を。よ。り。傍。ま。る。こ。ら。く。赤。裸。う。る。除。松。よ。る。よ  
と。く。ふ。か。と。投。被。る。愛。ゆ。う。る。う。た。單。衣。二。重。の。革。を。廻。糸。が。引。繕。  
間。又。丘。傍。ハ。豊。浦。と。四。立。兩。の。金。と。系。圖。の。横。巻。を。う。る。來。う。と。  
肩。を。高。く。一。あ。く。ま。く。う。る。眼。ふ。淚。を。浮。め。寢。よ。入。の。親。の。う。う。ハ。鳥。夜。  
あ。ト。ね。じ。る。子。を。め。道。よ。迷。ば。う。そ。女。が。母。ハ。深。く。も。歎。け。これ。も。入。子。の  
可。憲。を。あ。ざ。る。も。の。う。ね。ど。教。ぐ。を。を。り。い。ふ。せ。ん。身。の。中。の。腐。ま。る。  
ま。く。剝。除。ざ。れ。ば。餘。毒。骨。髓。よ。び。べ。ま。ん。ば。今。日。う。親。よ。あ。と。ば  
子。よ。あ。と。び。足。の。向。う。ん。方。へ。卦。け。助。ぐ。を。令。を。助。乃。さ。き。が。

親の私こゝ。免めんぐうに罪を逼のしく。追放おほきひ公の道みち。汝なが盜ぬすむる金かねも  
僅へうよ二枚ふまいすれど。殿とのの軍要ぐんよう金かねすれば。その罪ざい私わたくし免めん一いつぐ。やくは汝な  
一旦ひとたま念おもをうけんば。私が私の金かねをりそ一倍いちばい。離別りべつの裏うらよさうとぞえ。  
又また錦きんの囊裏ふくろを納のする。家の系圖けいたぐすう。つぶが年としゆうと竹たけの。うそぢよ  
あまれど杖てと頼たのひ。子こを捐けなへあつてうひすた。誰だれふうらの系圖けいたぐを傳つへ。  
孰なうこの家いえを遙とおせん。難居むづの家名いえなの絶きんと歎なげくふゆる。あまくにゆく。  
うつてこみ一いつ袖そでを。目め今いま汝なは授たまる。うそぞくも。人ひとうるうひよ。祝いのの物ものを  
あつとあくべ心こころを更かめく。情じやうある人ひとよ便びんく。身みを立た。家いえを與あせく。とりひ  
諭しるく。件くだんの金かねと卷袖まくらそでを。らが子この母おやとくふここう。忌きみとば。笑わらゆ。絶きせ母おや親おや  
の拭ぬぐふ涙なみだを。押おす。手ての舞まいる。ぬ悲傷ひじょうを。餘松よしのを。くわうすがら。  
羞おどかする氣きを。金かねと卷袖まくらそでを。懷いだく。被はめ。つと立た。うづくて外画ほかへ出で。

んと母おやを。母豐浦おとこらへ。忙いそく引苗ひ 苗め。せよやすて。余松よしの。自じの恨うらを。もすう  
は。うどく。答こたへ。勸解くわいざうづる。恩おんよ剛ごう。を。不ふ柔じゅうよ剛ごう。と。世よの常言じょうごんふ  
りのを。張ぱる。を。あひだうも。吾道ごどう。用もちひすば。め。教きょう歎かんを。知しく  
さを。だ。た。何なれを宿すく。竹たけ人ひとが。糲こめを。受うんと。学がく。云いづくともと  
ふうれ。ゆ。と。爲ため。才さい才さい剛ごう。と。居ゐ。兵ひつ傍よ。と。と。を。え。く。冷笑れいじょう。ひ。彼かれ世俗じよぞくの常言じょうごん  
ふ。惡あくよ剛ごう。と。又また。居ゐ。兵ひつ傍よ。と。り。と。ら。こ。う。え。ぐ。と。縉けいふ。ら。と。夫おとこ。吾お人ひと  
惡あくを。う。と。惡人あくじん。り。と。善ぜんを。植うん。されば。且よ。惡あく。を。計較けいこう。と。夕ゆふ。吾お  
を。獲と。と。力ちから。あ。と。善ぜん。を。植うん。されば。且よ。惡あく。を。計較けいこう。と。夕ゆふ。吾お  
と。語ごを。口くち歸かへ。と。子こを。教きょう。と。數かず。教きょう。ふ。ふ。と。と。と。妻め。う。と。例たと。す。う。ら。ん  
堯舜じょうそんの。子こも。聖人せいじん。よ。あ。と。盜ぬす。路じが。又また。宣賊せん。す。う。ん。や。そ。の。性せい。の。ぎ。く

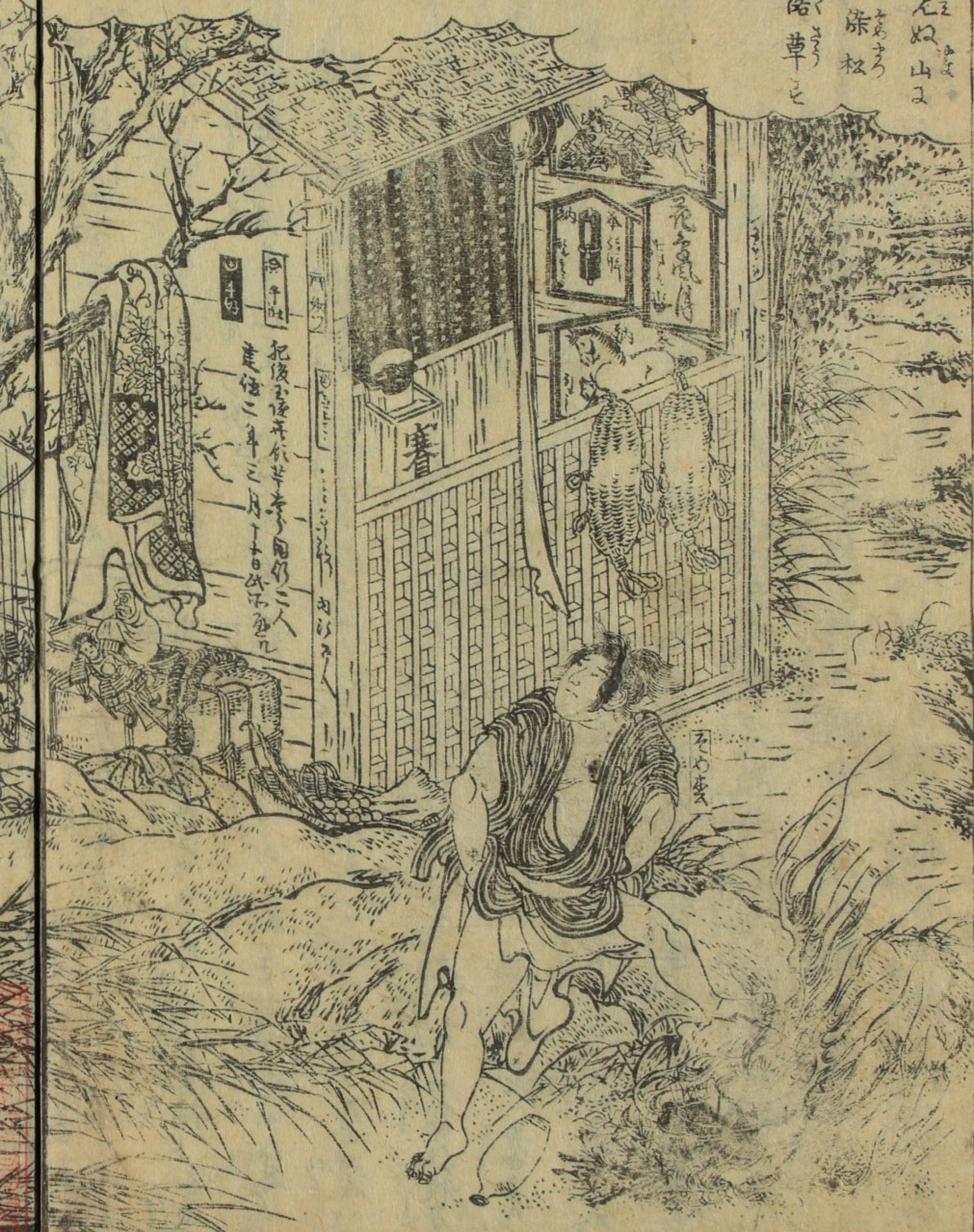
可。一寸の虫もより五分の魂あり。彼が目今の大運動をとどく。いふ恩  
の羈へ絶ゆ。アラモトの聲がべくへ孰をも怒りむる。ものども這  
を追出せ。とりたすむあくびをかじてうそ。豊浦がまくすとく。  
うと泣つ伏続めが。染松も母の顔をほぐとす。祝を母ひいきす泣  
きひそ。比とろがうるよく。と出でてこすへ坐せ。金銀珠玉りへがまく。  
うた衣ともを盜とく。かん見一人も染松が。ひと安とふ難ひべし。と  
やうふり子うそ。いりき母も僕猿く。又も呆きく口を辨。奴婢  
どもか舌を巻く。頻々驚き怕生てうぶ。染松うち腹うちく。噫汝亦  
ハ物食ふ木偶へき。う家の事を出そるす。すてはこれも又主うそばや。  
りと生どともうう利く。つぶが弄物するんどん。残すく被よ包み入生  
まげ。ほりごううの。夕餐の割籠准候へそ。跡より追著を。今宵の宿までへ送まく。

夏のひう日ハ堪へずたりのぞ。管絃をしくりくよ。板金剛の端緒を  
見し。と是彼を罵りへ。袖うち拂く。生もまね。室うちく。樹を折りて虫  
ハ樹うち生ト。才を亡モ劍へらう。う刃人。夫孝も親を慕ひよ。才を  
忠の恩を知るふ。世の童子ホ。善をえく。と是よ及びんすとを思ひ  
悪をそそぐ。と是よ似ざることなし。才学を後す。親切よ。賢ひ勢力  
も。忠孝の道よ。とけ入。信玄の林ふ。才を。五刑の罪犯。不孝う  
人慾の私う。一世の暴恩盜賊う。甚しきへす。只懼ても心も。う  
せ。龍泉の城。遙々東のゆく。卒不る山。石川郡の兼よ。到。う  
ゆく。山神の廟を。麻生と。昼夜へ終日跡をく人の袖。と携て。残を  
き。あると。ハ里ふ。と。お食る。短よ。人を。彼が種を。欺う。と。隣

本丸奴山又

落松

落草



物じよまゆをう。うれし。兵房が妻豊浦へ。その年の八月。月水常す。と。かく懐胎ふつん。ところもろひ。人もあつて不ぞ。すくね。一子さんと。竊疾あつて。うだり果て。深松へ追出しつ。この七八年へ。経て右房をうけ。みえりづらす。子を産むと。天皇が。難居の家を滅べ。ゆゑど。夫の欲び大きうじ。豊浦へやる。かくうた物ありひよ。身そへおり。うつて。生死の母ども。いふ憑ミ寡く。て。かくとす。弥ナぬ。

○ 第二芳宣よ稱れ 濃涂草

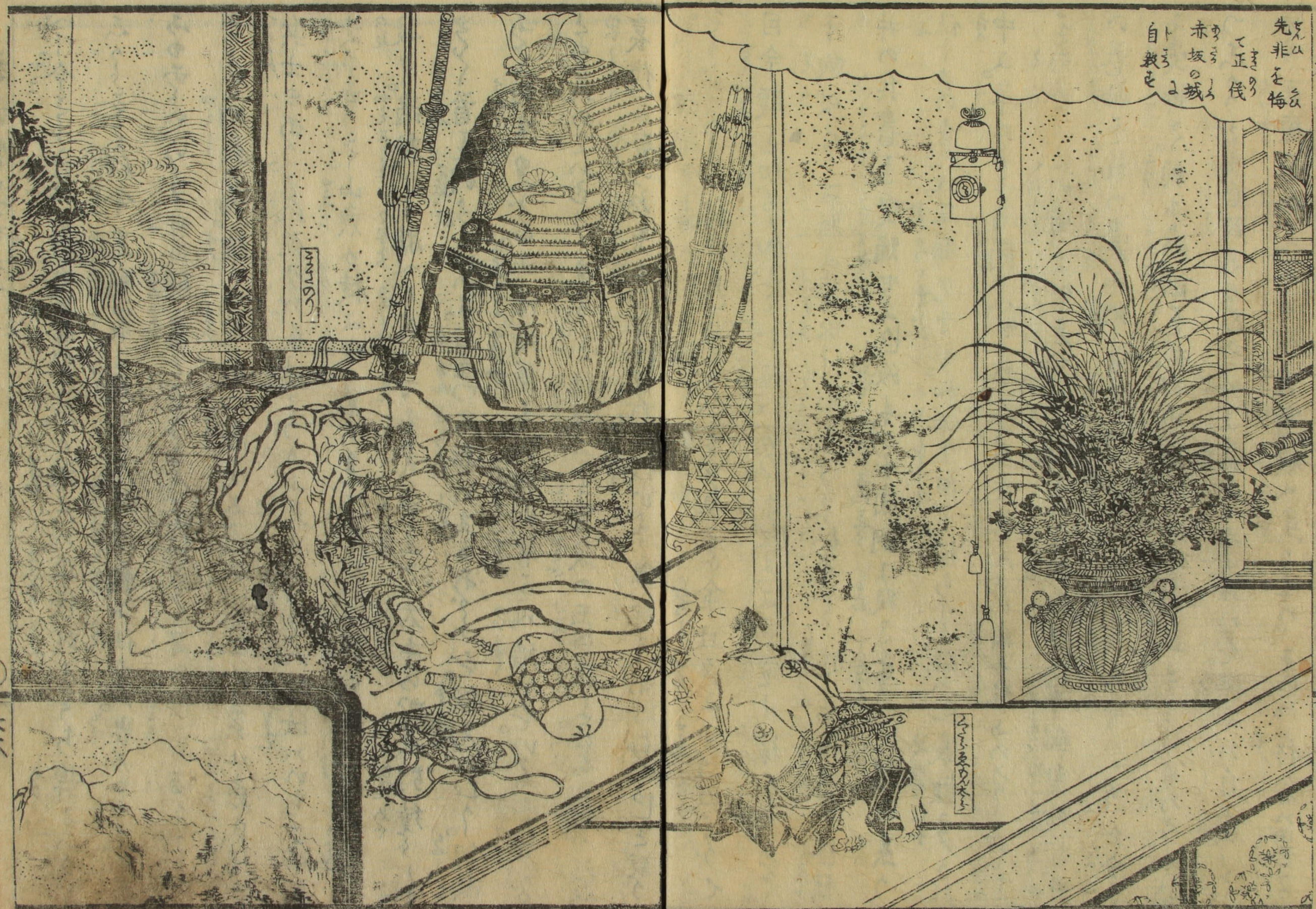
朝み。永徳と改え。あく。南朝。すくも年号を弘和とさん改め。か。今該五月の下旬。兵房が妻豊浦へ。産の氣つく。せ。生母。女子されど。七夜をゆ。徑びて死ふ。されば。母の悲も。又の幸意。比。人ふきのう。されど。豊浦へ。血暈ゆるく。多く。うふ肥ち。あく。ひうを乳房の。りと。あやみふ。張り。悔しく。おひ出で。乾も。死。死牛の旅。うちよ。と。啼く。古巣室へ。鳥の声。子あれ。縁ふ。歎。あり。かれおくる。主君正武の夫人。俄頃。身すく。今。三才の事。河内守正元の。一子。操丸。よ妻せんと。福祿の中。う。結髪。や。

正哉あくに愛慈を幼かき力のふ。瘦まる乳限を舐らへあがめむ。渴むて病を候ふ御す。乳母を難うて彼によ寄り。國の時されば。うる給ひのため頃あらむ。難居兵團が妻近曾子を産す。子はうきうれど。乳汁は常う太い。重厚うござりや。とやまをりあまうて正哉がる。兵團を招たず。叮寧ニ律の疏を以て。トモレ。もと一女が妻をめぐ。秋野姫が餓を放す。と宣ひよ。兵團へ至るをうけめぐ。家又退て。豊浦又主君の仰を告めし。俄頃は給事の准儀をどもふ。豊浦をこうちゆなど。火急の召し締後生て。まことにそのうひす。といふがまえ。うづきの用意にて。物を整ぬ當て。兵湊へ豊浦又對ひく。これと並んで。家又あつて夫婦あり。と居て。ひびく。ありて。ありて。官る所あり。去年の夏追出せ。除松がぶりぬよし。みゆりがふくと。りて念じ。夜ふ。やうを用ひ。秋野姫の養育を。かくよ。りひそ。彼姫君の母の前あらまを。恭長ま。達の脚。かくよ。あくまふ。あくう字あらせうが。大なる不思え。さるぐの人のよ。み。女があく。と。ゆかく。化をゆ。指す。指す。それと笑ひ。あく。といひ渝や。豊浦へまづはる。日より。言ひ。又慎。まづく。器。ふ十二分の水をり。と。これと温。と。りくるが如く。他より多く字を進む。社。秋野姫も。手馴あらま。豊浦がほくふ。片時をとどめ。いつひう。も。過世あらく。あらま。信。と。まも。ゆす。正哉の形勢をみて。餘飲び稚兒と病人を。抱よ。手のと。だらう。うくもあく。ううのこ。室よ。女児へ。うれ。乳母をねらう。只管賞美せ。と。

程々難居兵傍へりと面目ふがえつ。頃一も八月朔日田家家の慶賀のつゝ  
果々退きテウバ既と預る奴隸が生う古のめままでやうとゆう。以  
今りと怪しうる男。のみ書函めにうりのを懷み。僕が袂を乾すと  
母とうふ本と。へと進じゆて。ひひく。と。物を。付ひ。と。相  
とすがく。件の男は。渭す。失う。え。商せ。す。じつ。縁ね。おと。兵  
傍。まく眉根を。う。せ。いく重とも。あく。上。裏。一。る。流。席。を。切。と。と。す。  
や。ふ。蓋。を。閑。が。内。又。一封。の。手。書。ゆ。り。て。難居。兵。傍。ど。く。正。儀。と。写  
え。ば。云。いつ。ふ。と。云。驚。を。忙。く。蓋。を。舊。の。ど。く。す。便。室。よ。そ。す。入。  
障。子。立。か。く。封。使。を。勧。剪。る。び。す。ふ。と。互。を。続。よ。これ。才。浅。く。虚  
と。足。ふ。む。と。昌。を。う。と。と。多。り。又。の。遺。余。ふ。懃。り。く。三。利。家。へ。降。ま  
し。る。永。年の。恨。を。省。見。を。ゆ。と。面。う。天。の。責。脱。と。ぐ。と。長。を。病。す。  
うち臥。一日ふく。才の哀を。あ。ゆ。ふ。病。死。えん。の。本。意。す。い。は  
ば。今。一。ト。と。び。汝。対。面。後。の。う。う。ど。も。頼。ミ。せ。え。家。傳。の。兵。書。探  
井。の。巻。袖。を。正。勝。山。え。木。贈。遣。自。殺。を。不。や。と。あ。へ。す。伍。員  
死。一。く。呉。王。滅。び。范。蠡。去。閩。越。荒。ひ。悔。う。く。汝。が。練。を。用。ひ。ぞ。  
深。く。か。ふ。羞。を。あ。う。り。一。舊。恩。空。う。ぞ。て。生。前。又。見。臨。う。ぞ。  
幸。甚。一。く。と。と。ぞ。書。う。り。た。兵。傍。も。れ。を。続。く。と。と。坐。又。善。涙  
一。と。と。振。た。身。よ。ひ。で。ぐ。ん。や。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
明白。ふ。め。え。あ。り。と。と。辞。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
做。明。白。ふ。め。え。あ。り。と。と。辞。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
居。ん。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
赤。坂。の。城。み。ぬ。捕。左。馬。頭。正。儀。病。苦。日。す。す。と。と。と。と。と。

頃日難居兵六房へ消息なく。彼を招ひ。家傳の兵書を附屬  
しく。正勝正えよ。今取の志をもとす。人よろびくことと  
往る。八月もと半そど。兵六房へ音耗だよせましう。今テも  
とくらひとえ。有日百濟右衆つ太郎。美包といふ近臣。只むうゆ  
を枕方近く招ひ。岸破と起く。ひざまゆもとあくとれむ。こゝに  
いへや。汝も童ぶきうり。召使く。ひざまゆもとあくとれむ。こゝに  
頻ふ先非を悔く。自叙せんと。ひき定めしる。律の競も。曩ニよ聞え  
らじせらば。今亦審みへりとび。拙き筆下みゆ誠を告ぐ。難居  
兵傍を喰べとづく。タクナで本ざるハコレを疎もの深きれべふや。  
内ふくとくも。正武よ洩せんと。階ひそくら。あ曉の森見よ  
せ。初雁が音も代よ過ぐ。只一枚の回報どよせぬ。強顏人を  
そくふゆわく。待ゆとびとくひそくら。不命且々よ追うぬ。ようて  
目今腹を切らん。がくぞ。汝ハ力の。まだまよ電。縁を求めく。  
牛歛破する。正勝よ奉ム。おをうぐひく。己が遺言を告ぎし。櫻  
井の兵書を受彌せよ。汝もとが南朝よ殺さありく。後又系り  
仕一のされば。正勝兄也。和田主役。櫻らどと召へ。家隸多く故  
中よ。年うそと弱れ。かれて大弓を托ん。汝が外かく。うくま  
を引うく。と叮寧よせえつ。枕の母とくよ私を。右衆つ太郎ハ三と全ま  
の巻袖を。御の囊裏ふ納す。遍よせら。右衆つ太郎ハ三と全ま  
ふ受捧く。頻ふ感涙を拭ひゆ。遣言の競も。うけたうゆ。ひ  
つ。ふくと自殺ふゆ。世よ益ある。ゆめひを願く。自愛く。  
ゆく医療を加え。ふくび吉野殿へ。まうゆ。その存念へ果る。

先  
非  
正  
赤  
坂  
自  
教  
と

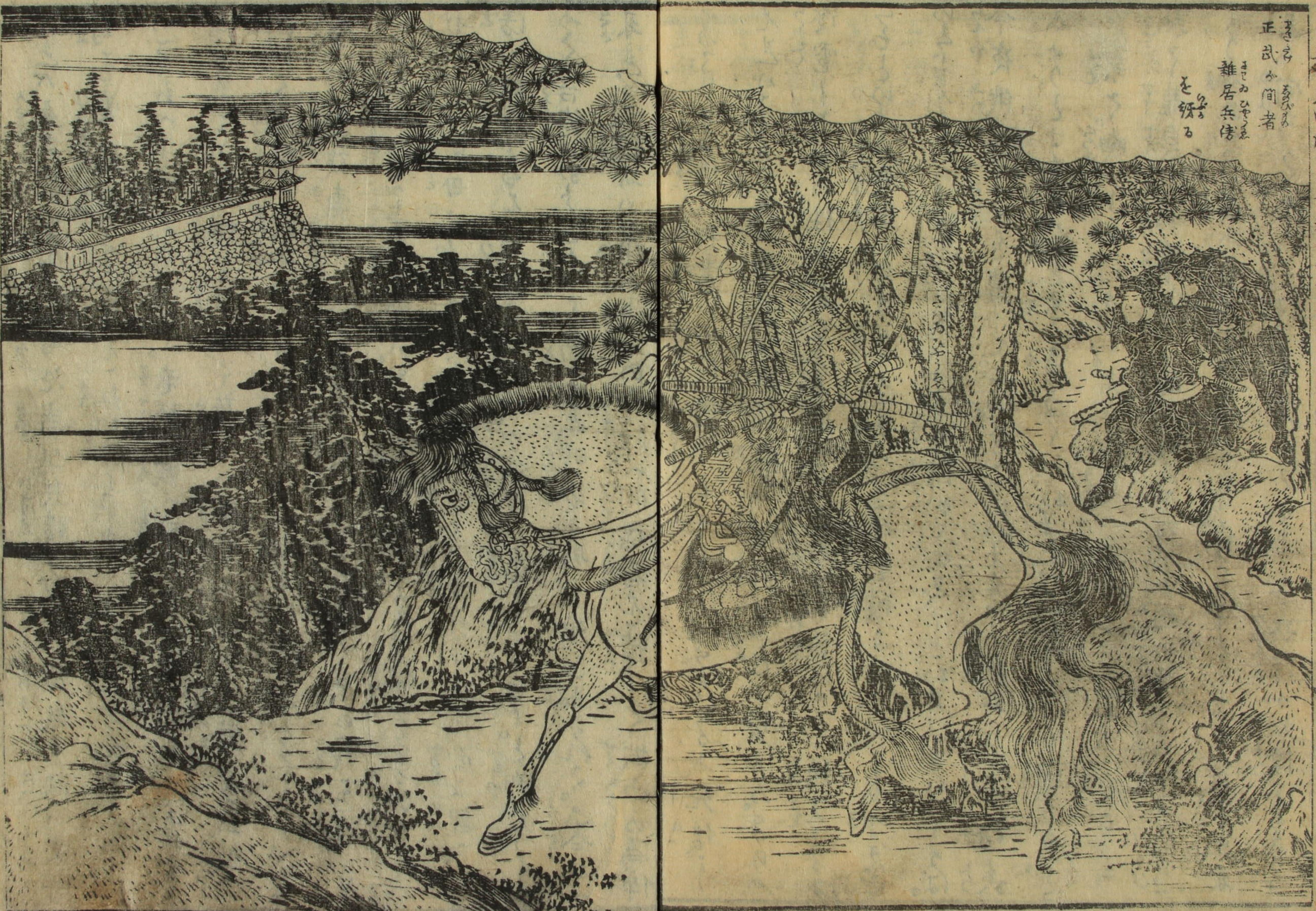


べ。今さう死をひそむあつたれと練をば。正儀改をうち掉く。いきく  
ゑく。今足利家と叛ふ。又南朝ふ仕え。忠あらゆる。も美  
すもあらゆ。ひよ世の胡慮とええ。されども刃の恨を悔ふ。此  
やうふ病死す。雖久最朝の志をもつべ。の城中ふ。山魚氏清  
兵士めあつ。これ死す。氏清もぐうと耳く守りん。汝れひちくやく  
まい。さう。山魚か候。怪しめらまえ。とりひも果を枕上。うろ刀を  
抜く。病歿する。膽へ刀尖二寸ぞう。突立く。右半のめく。引緒く。  
さく首を刎よ。とりふ。右半つ太郎ハ立ゆあらず。保元のひ。朝敵  
さく封主ゆ。正清。延景を六條判官を以階せ。ひよ。宣ひよ。朝敵  
とも。これのそめあらゆ。と推辞つ。秀。浜の玉の緒を。驚て。あらぬ  
哀傷よ。聲て。免きうじ。正儀いよ。焦燥く。あらむ。しと取  
え。身と刃と襟と襷と推く。諸手をかけく。これとくが。頬うなじ  
目トうる。勇士の最期をめよ。右半つ太郎義包も。主の迷惑  
を化ふ。せよ。もく。もく。落る涙を。押拭ひ。慌くる。おもむく。外面へま  
出。近後の侍よ。やと告へ。衆皆大ふうち駆き。是彼の多う集  
合。呆果てせんをもつた。正儀の夫人ハ世を早く。嫡子正勝。  
二郎正元。父と不和。十三箇年。胡越のぞくすれば。家譜も。  
互に疑ひ。罵り。ひひ。外は騒動を。緒の紛まよ。義包へ。後門  
よりまよ。土小深と。里ふ。此の由縁あらば。彼多よ。隠家を索。千  
銃破の城へ。争ひ。争ひ。もぐもぐ。頻々。肺肝を摧。よもよも。  
もく。雜居兵傍へ。故主正儀の消息を。尋ね。そや。十日  
あきく。と過。やう。ひの。焦燥く。終は。後難を。督せ。遠寺ふ。

いひこらへ朝と城を出。只一騎。赤坂より程近き。苦楚持まつて  
古寺ふむ山。割籠を開く。湯をさんとく。厨裏の火をこし  
取。生道ふ木両三人落栗の虫を擇り。地坑の灰へ埋めほ。  
うち暗火を吹く。一人がりゆす。赤坂の塙生捕正儀ぬ。えり病  
臥り。すぢが病苦を堪ざり。俄頃よ物うかくさりて。まづ自  
殺し。死しぬ。よりて柴竹山の老臣。誉高行直。交野の城を下す。  
赤坂を守ると。そん。ひまざせよ。投寄せざる。彼人をやめてがる。し  
とりよ又一人が。ひよ。そん。虚縫す。交野へ道も遙。年東古  
市ふ在陣。一夕。山魚氏清。夥の軍兵をねぐ。翌も入城。し  
ぞ。誉高きが。分際。千刃破龍泉。両城の剛毅を押へて。す  
れど。氏清の本意。理を稱す。とりよを難居。兵將に計  
とも。竊笑。うろ驚。さればこそ。緯後。志の他と。うりえ  
詐謀。その虚実をあく。やとく。咬く。裡ふ。近村の郷士  
が。追鳥狩ふ。歩ふ。牛ふ。とく。湯を乞。割籠を開く。件の事と  
同よ。法師をと。和田捕が間諜者。うべ。猪。うべ。うべ  
り。えん。まぐす。うけ。うけ。四表八表の物。うす。うす。再て  
向ふ。とが。なれ。辞。別と。門前。まし。出。ほく。と。弱ふ。もふ。  
所。延。今夜。赤坂の壁。ふ。外。き。白地。よ。元。を。問。べ。も。彼。塙。み。故。僚  
友。も。駿。す。そ。や。り。り。ん。や。問。ん。と。あ。で。躊躇。そ。急地。よ。却。と。う。怠。改  
内。う。と。馬。ふ。う。跨。つ。赤坂の城を。扱。く。き。と。う。ふ。秋の日。ま。ん。が。經。く。て。  
そ。と。途。ま。く。日。ハ。暮。ま。う。月。も。出。ま。ぐ。天。結。陰。そ。人。ふ。曆。が。あ。便。ひ。  
鞭。を。鳴。う。風。よ。追。し。三。峯。駒。の。尾。毛。も。戦。く。草。繁。の。雲。を。拂。や。

酒の比及ふ城の隣際へ跨る。前面を傍とし、門扇を固く鎖す。  
當下兵傍の声を立城中は物あらず。雖そ出立て、宿泊の主は遠見  
の兵士擣る。行駕の使者ありや。と聞は。兵傍矣。蓋ハ古市の氏  
清ゆ。ましこき。すめり。とぞも。かまく。如法夜のとされば。門を開き  
まよひ。どく。まよひ。せんゆ。ほん。老ぼうする黨一兩人。ゆとりふ。且く  
し。右近す。物の窓を押開り。老兵二三人。うち。あく。招げ。難居  
ひ。す。馬を近く。あく。老兵。ホヌ。対ひ。左典既自殺の。驚き  
兵傍。す。馬を近く。あく。老兵。ホヌ。対ひ。左典既自殺の。驚き  
り。ふ。み。人年來。極意。正成正経相傳の兵書。桜井の一袖。さ  
の。利殿も。くも。タヒ。かれ時。紛失せがいと惜む。さゆう。はや  
ち。桜井の。卷袖。を。う。遍。と。氏清翠。ハ。や。す。と。入城。よ。く。さ  
く。主命。の。ご。と。を。欺。き。る。老兵。ホハ。主。を。や。く。頻。よ。改。を。搔。き。毫。子  
の。アリ。アリ。件の兵書。ハ。正。侯。病。臥。一。手。と。を。あ。ざ。る。死後。ト  
見。見。バ。ア。リ。の。う。五。千。枚。百。濟。右。足。太。郎。義。包。と。ひ。ア。リ。の。さ。り。ふ  
遂。電。一。く。そ。の。往。方。室。う。ア。リ。ビ。ホ。リ。又。彼。り。盜。と。う。く。逃。失。と。ま  
ニ。モ。と。り。ふ。兵。傍。ハ。り。と。早。を。失。ひ。う。角。を。彼。又。向。よ。傍。と。も。喰。え。ぞ  
り。ア。ゼ。ル。と。ア。リ。シ。ウ。ぶ。ス。リ。ア。サ。ベ。い。と。奉。意。す。く。ぞ。聲。を。づ。き。お。の。く。ト。く。守。り。タ。く。は。  
今。夜。俄。頃。ふ。某。を。遣。り。そ。の。手。を。い。つ。タ。く。既。ふ。兵。書。紛。失。  
ふ。う。と。ア。リ。ア。ベ。い。と。奉。意。す。く。ぞ。聲。を。づ。き。お。の。く。ト。く。守。り。タ。く。  
し。果。そ。輿。つ。を。引。く。一。ふ。ア。ジ。馬。の。足。搔。を。そ。ち。つ。夜。を。ま。ら  
馳。ア。龍。泉。の。城。近。く。う。隨。ふ。天。ハ。天。の。ぐ。と。明。ふ。タ。リ。浩。氣。又。前。面  
う。物。め。年。と。馬。ふ。負。し。ア。ク。ト。も。資。負。ア。ク。ト。立。七。人の。男。出。来  
ま。り。間。ら。く。う。う。う。ほ。ト。く。これ。を。え。ふ。ま。ま。兵。傍。が。奴。僕。ど。も。う。う。

正武を簡者  
雜居兵傳  
を継る



けよ。互にうへりふ。と驚き悉ひ。兵湧す。そろ縁故を問バ衆皆  
馬を牽居。負う。身を扛る。そつてやうとう。殿みへいをもふる  
めまえべ。暗々去のびく。赤坂の城へ卦みゆひ。うなづきを。館あらわく  
五うきし。ふん憤り甚しく。難居ハ原本正俊。家隸うるふ。彼今  
滑びく。赤坂小交かうる。ひと怪し。うれ歎又内應せんとく。うりべ。  
あれバ親族妻子一入も残さず。首をこうりかけく。敵の膽を挫ぐ  
べれど。兵湧が妻豊浦へ。云はま夫ふ似む。ふうづ信ちる。のふす。  
秋野姫が乳母う。彼ゑて女児を拿ぐ。これに面又覗く。兵  
湧か奴僕どもを追走す。主従が調度ハ悉くしませよ。と仰せ  
ふく。吉備へかどき。余を助ら。曉方小城を追ひ出され。と今て  
來も。こ館ふ。常ふ上下の赤坂へ。間諜者を遣す。城中の爲偉  
を窺へ。夕とぞ。やれバ昨夕の景迹を。間諜者が闇窺く。殿う  
先へ走り。審ふ訴まうせ。うるべ。ア虚と。帰り。うら。急地  
醯ふせきと。ひすん。そく曉方小城。と信ふ。うちと告よられ。兵湧  
へと至を。やも。そぞ。只官ふ呆果そ。ふり。被役を。回参ゆる。せぞ。  
ひの由一ふらふ。ゆ。従故主ふ。報くとも。館へ告。手で。往く。と。舉動  
あく。疑。そも理。や。かく。左典。既自殺し。ひそ。その臨終よ。のふぞ。  
梯井の兵書。失う。とり。ば。立ゆ。う。そり。ひと。う。実。う。と。う。  
べう。そぞ。正武智勇の良将。ゆく。在せ。一時の怒ふ。衆ぞ。ア  
妻子を。殺。う。ひ。そ。奴僕どもを。追放。そ。主従が。調度。よ。至。う。  
うじゆ。る情。ふう。よ。豊浦も。身の幸。のう。幼。を。姫君の乳母。  
ま。う。う。彼の。城ふ。争う。ぬ。う。そ。ア。恨を。勧解。ある。う。う。う。

べけを。一旦主の怒を避く。竹地へすりとも身を離す。時を経んず  
と深念し。こそ奴僕木村にす。又が赤坂の城へ赴きする。故あまの  
あく。あくとそらみかねど。緯明白あら云解く。うやいと解ぬて  
聽く。とす。主よ疑生く。うづふ影護く。傷難を脱むる。と  
あり。べ汝ホガ練は隨ひ。身の住処を窺ひ。もと懷よ此の金露  
ハ。その調度さんど。おのくつらうとう。それを路費とす。故郷へ帰れ  
く。と叮寧ニ縦示せば。多く頻ニ嘆息し。世ふ厄難といふとす。  
吾人の如ひ屋とひゆう。殿の誠忠を確く。もとぞりん。日來ハ人す  
稱噴ら。うとあひ。うふ。くも俄頃ニ世間の挾くすりにてり。う  
縁故ハ。うとひねど。これ厄難ふこそ坐らしめ。浪人。うひてん。うう  
便うとろぐ。せとく衣服のそそりとす。齋。一ゆ。こうふ。兵六秀。頗  
小賞嘆。主の凋落ニ物をうそ。自の偉偉をあらへ。うこの人の  
私。うよ。汝ホもさむなく。當時。も主を。志ハ故。うれど。され今は  
うの綱度どもを悉く。身。著。一生。坐。食。も。う。う  
りそわげ。とひ。瑜。汝。奴僕。ども。ひ。感。寂。を。拭。主。従。遂。東  
西。え。う。れ。おの。が。そ。そ。ぐ。よ。う。ふ。う。次。の。日。千。劍。破。龍。泉。の。兩。壁。へ  
正。侯。自。殺。の。う。う。と。う。今。う。う。驚。歎。あ。の。び。く。う  
和。う。う。う。お。う。ど。う。凶。音。を。う。今。う。う。驚。歎。あ。の。び。く。う  
僧。を。招。た。く。続。往。う。追。若。形。の。ぞ。く。う。行。ひ。ね。當。下。和。田。正。成。ち  
千。劍。破。の。城。よ。來。到。く。正。勝。あ。よ。難。居。う。を。告。も。し。正。侯。件。の。兵。情。ふ  
内。應。う。う。奸。計。と。う。う。曉。ひ。と。物。狂。く。う。自。殺。う。う。殺。只。惜。ひ  
べ。う。援。井。の。兵。書。う。と。う。正。勝。正。元。も。又。祖。相。傳。の。秘。書。う。故

ふ。これを歎みテ。せんへりとおをて。速よ赤坂の城を攻落す。様井の  
一油をう。復そく。とりたちたす。氏信景勢すく。彼城へ籠つ  
と。えが。これも意み任せど。物もり。おへでのもなう。豊浦ハ子と棄夫  
を。小捨。悲歎す。めぐる。豊浦ハ子と棄夫  
の。傷の人よ笑ひ。志を励。憂。憂。堪。忠告節義  
ハ婦女子。稀。す。日本。を。す。ひ。す。

松珠情史卷之一終





